

史料紹介「山本五十六元帥の書簡等」

下河邊 宏 満

防衛研究所図書館が以前から所蔵していた山本五十六元帥（以下山本と呼称）に関する複製史料としては次のものがあつた。

- 一 「山本、古賀両元帥書簡（嶋田海軍大将宛） 其の一（山本の分）」（昭和七年（一九三二年）二月）昭和十八年三月）。
- 二 「昭和十五年十二月十日 嶋田大将宛山本五十六書簡」。
- 三 「昭和十六年）昭和十七年 征戦以来戦備ニ関スル意見書簡等」（及川古志郎海軍大臣宛ハワイ作戦構想、吉田善吾軍事参議官宛ハワイ作戦直後の状況判断等及びラバウルで発見された山本元帥の遺書）。
- 四 「山本聯合艦隊司令長官親書（清水第六艦隊司令長官宛）式通」（昭和十六年十一月及び昭和十七年末）。
- 五 「吉田善吾あて山本五十六書簡」（ドーナツの東京空襲

に対する所見等）。

六 「榎本資料（倫敦海軍条約締結経緯）五峯録」（以下「五峯録」）。

六項の「五峯録」は昭和二十七年に、元海軍中将堀悌吉が山本の書簡、覚書、古賀峯一の堀あての手紙などを取りまとめ、将来資料として世間に示す時がくると考え、甲冊乙冊と二部だけ作成したものである。

「五峯録」には山本の堀あての手紙（昭和九年十月一日）昭和十八年三月六日）を抄録したもの、極東軍事裁判時に弁護士が持っていた書簡の写しで元海軍大臣島田繁太郎あてのもの四通（昭和十四年一月二十五日）昭和十八年一月六日）及び古賀峯一あてのもの九通（昭和十六年一月二十五日）昭和十八年一月六日）等が収録されている。

さらに「五峯録」の中には山本の手紙以外に、山本が書いた「戦備ニ関スル意見 覚」及び「述志」(遺書)に対する堀悌吉による解説が含まれている。堀は山本と海軍兵学校同期生で、莫逆の友であった。

解説の内容は、山本の覚書等に対する由来、戦中・戦後しばらくこれらの史料を世に公表しなかつた理由及び史料に関する註説等である。

註説には、山本の時局観及び責務感、兵術思想、対米作戦の基調及び山本自身が戦争反対にもかかわらず勅命を拒まなかつた理由が述べられている。

山本はとても筆まめな提督で、知人、友人及び愛人等に沢山の手紙を書いている。その証拠にたとえば平成十一年四月に開館した長岡市にある「山本五十六記念館」には、山本の自筆の書簡が数多く展示されている。

しかし、山本の手紙の中で彼の本心が良く出ているものは、作家阿川弘之によれば堀悌吉、山本の愛人河合千代子及び海軍省官房書記官榎本重治(ロンドン海軍軍縮会議に山本と同行)あての手紙である。

山本が手紙で本音を伝えたと思われるもう一人の人物がいる。山本が連合艦隊司令長官時代の海軍次官澤本頼雄である。

澤本は山本と同じく対米避戦論者であった。澤本は、山本の「戦備ニ関スル意見 覚」及び「述志」等が入った袋を預かり次官室

に保管していた。この袋は必要な場合堀に交付することになっていた。澤本は、山本の戦死した一ヶ月後、この袋を堀に渡した。

これが既述の「五峯録」の由来である。

今回紹介する史料は前記六項以外のもの、即ち、この澤本にあつた山本の書簡八通(うち一通は口絵写真)である。これらの書簡(原本)は、平成十二年六月に澤本頼雄の日記と共に遺族から当研究所図書館に寄贈された。

これらの手紙は、昭和十六年八月十日から昭和十八年二月二十三日の間に書かれたものであり、以下、判読した文章を左に添えた山本の書簡七通(縮小複製版)を掲載する。○印は判読できなかった文字である。

時局益々重迫種々御辛勞の御事
 と拝察罷居候
 頃日近衛公の對米メッセージに關し
 世間硬軟兩論ありとて所要の場合
 の応酬振筆御指示相成候處
 艦隊ハ本来の責務ニ應じ候心物
 技の各方面に亘り必戰死闘の覚

拜啓
 時局益々重迫種々御辛勞の御事
 と拝察罷居候
 頃日近衛公の對米メッセージに關し
 世間硬軟兩論ありとて所要の場合
 の応酬振筆御指示相成候處
 艦隊ハ本来の責務ニ應じ候心物
 技の各方面に亘り必戰死闘の覚

悟て真剣ニ努力致居候へ共輕々ニ好戰的
 言辭を弄する如きものハ無之逆ニ深刻
 二時局を凝視し居る様ニ被感候
 唯々今回母港への帰港ハ誰云ふとなく
 最後の袂別を意味するものと覺悟致
 居候模様なれハ黙々の間此悲壯なる海
 軍決意の程ハ部外へも自然反映
 可致今更海軍ハ強しとか弱しとか

悟て真剣ニ努力致居候へ共輕々ニ好戰的
 言辭を弄する如きものハ無之逆ニ深刻
 二時局を凝視し居る様ニ被感候
 唯々今回母港への帰港ハ誰云ふとなく
 最後の袂別を意味するものと覺悟致
 居候模様なれハ黙々の間此悲壯なる海
 軍決意の程ハ部外へも自然反映
 可致今更海軍ハ強しとか弱しとか

市井の雑音の如きハ意ニ介
 するの必要無之タカハ非常時局ニ
 於てこそ命も入らぬ名も入らぬ忠義一途
 の所謂始末ニおへぬ氣魄さへあれハ充
 分と存居候
 次ニ戦備中最急を要するものハ申
 す迄もなく航空ニテ人員機材共々
 さてあれてあぶなげなきか開戦と

いふ市井の雑音の如きハ意ニ介
 するの必要無之タカハ非常時局ニ
 於てこそ命も入らぬ名も入らぬ忠義一途
 の所謂始末ニおへぬ氣魄さへあれハ充
 分と存居候
 次ニ戦備中最急を要するものハ申
 す迄もなく航空ニテ人員機材共々
 さてあれてあぶなげなきか開戦と

航空機の二百五十機消耗を申し
 めて、^{併せ} 航空機を二千機と使用し
 油を果して之は、^{併せ} 航空機の
 消耗大慶と存居候
 目下、中央研究機関ハ、工率ハ二
 改組トカ合併トカ仄聞するも之れ甚しき

なれハ第一日の二百五十機消耗を申し
 めとして最初の一段落迄二八千機を使用し
 尽くすことハ火を見るよりも明らかなるトす
 補充ハ果たして之ニ伴ふべきや老人の杞憂
 として一笑に葬り得る実状なれハ
 国家の大慶と存居候
 目下、^Y（航空）中央研究機関も其の工率ハ二して
 改組とか合併とか仄聞するも之れ甚しき

愚策にて如何ニ組織をかへたとて無より有
 ハ生せず陸軍技術の全般的失敗を
 見るも明なる次第寧ろ一日も速ニ従来の設
 備を進め然る後之を合併すると分
 離すると充分考へてやれハよい事と
 信居候敢て一筆申添候
 東京ハ食ものハわるし雑音ハ多し
 大分神経衰耗の人たちも多から

愚策にて如何ニ組織をかへたとて無より有
 ハ生せず陸軍技術の全般的失敗を
 見るも明なる次第寧ろ一日も速ニ従来の設
 備を進め然る後之を合併すると分
 離すると充分考へてやれハよい事と
 信居候敢て一筆申添候
 東京ハ食ものハわるし雑音ハ多し
 大分神経衰耗の人たちも多から

大分県 大分市 中央各位
 澤本次官閣下
 八月三十一日 山本五十六
 敬具

むと被察候 大臣はしめ中央各位
 の御自愛を切ニ奉祈上候
 敬具
 八月三十一日 山本五十六
 澤本次官閣下

昭和十七年二月十一日 山本五十六
 澤本次官閣下
 拝啓 歳冬益々御清康慶賀の至ニ
 御座候
 さて左記私用作恐縮宜敷御願致候
 頃日小生宛ニテ二回山本五十六伝の如きも
 のを刊行致度ニ付「承認」を得度との
 照会有之候處是等ハすへて「謝絶」
 致置候○若し海軍省等に交

歩の歩の... 山本五十六
 澤本次官閣下
 拝啓 歳冬益々御清康慶賀の至ニ
 御座候
 さて左記私用作恐縮宜敷御願致候
 頃日小生宛ニテ二回山本五十六伝の如きも
 のを刊行致度ニ付「承認」を得度との
 照会有之候處是等ハすへて「謝絶」
 致置候○若し海軍省等に交

昭和十七年二月十一日 山本五十六
 澤本次官閣下

拝啓 歳冬益々御清康慶賀の至ニ
 御座候

さて左記私用作恐縮宜敷御願致候
 頃日小生宛ニテ二回山本五十六伝の如きも
 のを刊行致度ニ付「承認」を得度との
 照会有之候處是等ハすへて「謝絶」
 致置候○若し海軍省等に交

渉の場合ニハ宜敷御指導願上候
 先般級友森田良雄中佐よりの返事
 の要旨ハ左の通

- 理由
- 「承認」ニ對してハ「謝絶す」
 - 一、小生ハ欠点だらけニテ修養中ノ人間ニテ
 是等刊行物ハ世をひ益せず
 - 二、從來雜誌新聞等の記事ハ概ね
 事案相違ノ興味本意なること
 - 三、営利ノダシに供せらるゝ事もあるへきを

不快とせ
 四、もし小生の性格技術等の真相を伝ふる
 ものとすれば軍機事項にて発表ハ禁
 せらるべきものと認むる事
 之から二三度東都の空襲てもあらハ
 忽ち山本何して居るかとなる様の
 世の中ニ交渉を持つ事ハ作戦実施
 上静心を保持する上ニも有害ニ付何分
 宜敷御願申し上候 敬具

不快とす
 四、もし小生の性格技術等の真相を伝ふる
 ものとすれば軍機事項にて発表ハ禁
 せらるべきものと認むる事
 之から二三度東都の空襲てもあらハ
 忽ち山本何して居るかとなる様の
 世の中ニ交渉を持つ事ハ作戦実施
 上静心を保持する上ニも有害ニ付何分
 宜敷御願申し上候 敬具

累次貴翰拜受多謝
 私用にて種々御配慮恐入候
 森田中佐ハ小生ニハ「自分の浅慮にて御迷
 惑をかけ不相濟今後一切此事より手を
 引きたるニ付承知し呉れ」との手紙有之候
 其他二も二つはかり同様の出版（一ハ承認
 を求め来れるニ付謝絶、一ハたゞ原稿を送りつ
 ばなしニ付此種出版ハ海軍省軍務局へ

累次貴翰拜受多謝
 私用にて種々御配慮恐入候
 森田中佐ハ小生ニハ「自分の浅慮にて御迷
 惑をかけ不相濟今後一切此事より手を
 引きたるニ付承知し呉れ」との手紙有之候
 其他二も二つはかり同様の出版（一ハ承認
 を求め来れるニ付謝絶、一ハたゞ原稿を送りつ
 ばなしニ付此種出版ハ海軍省軍務局へ

事前諒解を求むる要あるべき事、自分ニ
 承認を求められたるものハ一様ニ謝絶せる旨
 返事致置候。計画有之哉ニ被存候へハ
 宜敷御指導方願上候
 時々開卓の御様子慶賀ニ不堪候當方
 夫れハかりハ不自由ニ候へ共やむを得ずと
 諦め居候其代り其内海上ニ打つて出で
 満貫ならず共せめて三フアン位ハせしめ

事前諒解を求むる要あるべき事、自分ニ
 承認を求められたるものハ一様ニ謝絶せる旨
 返事致置候。計画有之哉ニ被存候へハ
 宜敷御指導方願上候
 時々開卓の御様子慶賀ニ不堪候當方
 夫れハかりハ不自由ニ候へ共やむを得ずと
 諦め居候其代り其内海上ニ打つて出で
 満貫ならず共せめて三フアン位ハせしめ

度ものと存居候
 餘寒きびしき節御自愛祈上候
 敬具
 二月二十二日 山本五十六
 澤本頼雄閣下

度ものと存居候
 餘寒きびしき節御自愛祈上候
 敬具
 二月二十二日 山本五十六
 澤本頼雄閣下

四、首領ハ豪州印度も来○せされハ攻略
 せむと公言せり之ハ兼陸相としての責任
 もありデマニテハ有之間敷艦隊もまけ
 てハ居られすと存し研究を進め居候
 五、此頃五日間與ニテ改装整備等を為す
 此間保利醫校長の顔をちらりと見ても
 一團ニ及ハずして訣れ不徹底ニテ出
 港致候 餘寒折御自愛候 敬具
 三月十五日 山本五十六
 澤本中将閣下

別便 配達 預言
 一、ガ島より飯来、陸軍第... 東上り
 二、ガ島より飯来、陸軍第... 東上り
 三、ガ島より飯来、陸軍第... 東上り
 四、ガ島より飯来、陸軍第... 東上り
 五、ガ島より飯来、陸軍第... 東上り
 六、ガ島より飯来、陸軍第... 東上り
 七、ガ島より飯来、陸軍第... 東上り
 八、ガ島より飯来、陸軍第... 東上り
 九、ガ島より飯来、陸軍第... 東上り
 十、ガ島より飯来、陸軍第... 東上り

閑言
 一、別便配達願上候
 二、ガ島より飯来の陸参謀、東京より
 飛来の陸諸公と會談の印象ニよれハ
 次會方タル攻撃ハ航空兵力前進
 死闘ニ成功せざる限り(ガ島敵)を弱
 らせる外數回敵輸送船團ニ大打撃
 を与ふる事等)断して成功せず

而くはるブナの確保等口丈け二て實
 りく決意し成算も陸ニハなし
 故ニ敵の出様ニよりラエ、サラモアも危
 険なり
 従て海軍としてハ此上陸ニ引きつられ
 兵力漸耗壞滅防止ニ付深憂慮
 慮の要あるを昨十一月二十一日ツクヅク
 感得せり中央も御緊禱の事

而て此間ブナの確保等口丈け二て實
 行の決意も成算も陸ニハなし
 故ニ敵の出様ニよりラエ、サラモアも危
 険なり
 従て海軍としてハ此上陸ニ引きつられ
 兵力漸耗壞滅防止ニ付深憂慮
 慮の要あるを昨十一月二十一日ツクヅク
 感得せり中央も御緊禱の事

別紙寺岡少将より来信有之候ニ付一應
 供養覽候
 内地ハ石炭も木炭も肉も魚も瓦斯も
 無之由 米なども四五月頃ニハ悲鳴をあくる
 二あらずや 理念内閣の実行内閣への改称を
 祈念する声大なりとか
 海軍も糧食艦ニて鯛やかき等供給し
 居るも其手数と内地民間の実情をきくは
 満足ニのどハ通らず候、時々ハ腐敗ものにて
 腹下しもせねばならぬし、之から先きハ

別紙寺岡少将より来信有之候ニ付一應
 供養覽候
 内地ハ石炭も木炭も肉も魚も瓦斯も
 無之由 米なども四五月頃ニハ悲鳴をあくる
 二あらずや 理念内閣の実行内閣への改称を
 祈念する声大なりとか
 海軍も糧食艦ニて鯛やかき等供給し
 居るも其手数と内地民間の实情をきくは
 満足ニのどハ通らず候、時々ハ腐敗ものにて
 腹下しもせねばならぬし、之から先きハ

陸海軍共米の一部と塩位にてあとハ中
 央の御厄介ニならぬ様せねハ軍需増産も
 国民元氣もあつたものニあらずと痛感する
 次第二で南東方面等ハ早速真剣ニ着手
 せよと敵命致居候(最近ラポールより今
 村八方面軍司令官来訪陸軍ハ二年
 後ニハ米でも何でも全部自給自足する
 考えなりと氣焔を吐き居候陸軍ハ自給自
 足より少し先キニ戦鬪ニ勝つ工夫の確立が
 肝要ならむ あまり戦がへた過ぎる判断が

陸海軍共米の一部と塩位にてあとハ中
 央の御厄介ニならぬ様せねハ軍需増産も
 国民元氣もあつたものニあらずと痛感する
 次第二で南東方面等ハ早速真剣ニ着手
 せよと敵命致居候(最近ラポールより今
 村八方面軍司令官来訪陸軍ハ二年
 後ニハ米でも何でも全部自給自足する
 考えなりと氣焔を吐き居候陸軍ハ自給自
 足より少し先キニ戦鬪ニ勝つ工夫の確立が
 肝要ならむ あまり戦がへた過ぎる判断が

出駄ら目過ぎると申し置候が陸軍ハガ島
 ニこり敵よりハ食糧を主目標とし居るらしく
 今次の来訪もニューギニヤ補給ニシテ(潜水艦)×8常置
 の嘆願にてワウ攻略ハ今秋、モレスビーなどハ
 其上にて能否をゆつくり考えるといふ話にて
 山本親雄大佐ニハ話し置候
 話ニならぬ話にて候

(小生義弟が某支隊長なるニ籍口してツケツケ言ひおきたり)
 出駄ら目過ぎると申し置候が陸軍ハガ島
 ニこり敵よりハ食糧を主目標とし居るらしく
 今次の来訪もニューギニヤ補給ニシテ(潜水艦)×8常置
 の嘆願にてワウ攻略ハ今秋、モレスビーなどハ
 其上にて能否をゆつくり考えるといふ話にて
 山本親雄大佐ニハ話し置候
 話ニならぬ話にて候

ましむるに生れし一ノ百に近くは手ノ基は
 小指一はま一進一退あるも治らずが島作戦
 終了迄皆が心配するからだまつて居り過般
 艦隊軍醫長ニ診て貰ひし處(誰ニも言ふな
 とハ申置たり)多分ビタミンBC(ことニB)
 の不足ニよるなるべしとの事外ニ右背中ニ
 肉と皮がくつついたりはなれたりする様の具合の
 こと毎日時々あり之も同様の原因ならむとて
 強力ビタミン剤を十日間注射せるも効
 果あつた様の無き様の様子一寸強力剤

夫れニ付小生昨年十一月頃より右手の薬指
 小指しびれ一進一退あるも治らず島作戦
 終了迄皆が心配するからだまつて居り過般
 艦隊軍醫長ニ診て貰ひし處(誰ニも言ふな
 とハ申置たり)多分ビタミンBC(ことニB)
 の不足ニよるなるべしとの事外ニ右背中ニ
 肉と皮がくつついたりはなれたりする様の具合の
 こと毎日時々あり之も同様の原因ならむとて
 強力ビタミン剤を十日間注射せるも効
 果あつた様の無き様の様子一寸強力剤

小指しびれ一進一退あるも治らず島作戦
 終了迄皆が心配するからだまつて居り過般
 艦隊軍醫長ニ診て貰ひし處(誰ニも言ふな
 とハ申置たり)多分ビタミンBC(ことニB)
 の不足ニよるなるべしとの事外ニ右背中ニ
 肉と皮がくつついたりはなれたりする様の具合の
 こと毎日時々あり之も同様の原因ならむとて
 強力ビタミン剤を十日間注射せるも効
 果あつた様の無き様の様子一寸強力剤

もなくなり目下休憩観測中(両足首
 のはれるのハ昔から二て別ニ進みもせず)若し
 ビタミン剤にて治らぬとすれハ病源ハ何かニ付
 自案せる處之ハ多分永年雀遊を廃し
 右手の運動不足ニ起因するならむと名判断
 を下せし次第ニて此治療法を試度も目下之
 のみハ実行し得ず遺憾ニ存居候
 諺に国乱れて落首飛ふとか真ならざるを
 いのり

一、後援大臣閣取引奨励のこと (某代議士通信)
 東條が奈良の都をさまよひて
 あきぬ巷に闇をねきらふ
 (奈良市に於て某日未明街頭視察)
 二、買物、ふと (軍部(海軍)中にも買物の直話)
 買物も星に錨二顔に闇
 馬鹿正直は行列て泣く
 武井歌の守の採點願度存候
 過日平洋丸にて遭難海上漂流三日の

一、總理大臣閣取引奨励のこと (某代議士通信)
 東條が奈良の都をさまよひて
 あけぬ巷に闇をねきらふ
 (奈良市に於て某日未明街頭視察)
 二、買物のこと (軍部(海軍)中にも買物の直話)
 買物も星に錨二顔に闇
 馬鹿正直は行列て泣く
 武井歌の守の採點願度存候
 過日平洋丸にて遭難海上漂流三日の

小枝救つらう、未名海軍少佐慰問
 團 (一行十名中副團長一名殉職あと女五、男四) ハ激
 励の結果大ニ奮起し兵隊の防暑服にて
 遠くマーシャル(大鳥島を含む) ラポール方面迄
 出かけ偉勲を奏し販着近く氷川丸にて慰
 問ながら内地へ帰る予定(三月一日頃着か)
 の由当司令部にてハ副官が盛餐を与へ小生より
 色紙を一枚宛強奪して引揚けたるが女子
 供ニてもいさとなれハなかなか大したものと感じ候
 喪失品の贖与等ニ付てハケチケチ言ハすニ

後被救トラックニ來着せる海軍少佐後援慰問
 声楽、舞踊、浪曲、漫才、手品師等
 團 (一行十名中副團長一名殉職あと女五、男四) ハ激
 励の結果大ニ奮起し兵隊の防暑服にて
 遠くマーシャル(大鳥島を含む) ラポール方面迄
 出かけ偉勲を奏し販着近く氷川丸にて慰
 問ながら内地へ帰る予定(三月一日頃着か)
 の由当司令部にてハ副官が盛餐を与へ小生より
 色紙を一枚宛強奪して引揚けたるが女子
 供ニてもいさとなれハなかなか大したものと感じ候
 喪失品の贖与等ニ付てハケチケチ言ハすニ

予等は是よりして防の如き(玉隊)其の
 長(長)たる感のいふるも(此)其の
 後(後)より(後)其の
 二月(二)月(月)に
 山本(山本)上(上)丁(丁)名
 向(向)の(向)越(越)ふ

氣持よく与へて頂度存居候(兵隊共ハ其藝

遭難奮起の

よりも其氣分ニ大ニ感めいせりとか尤も次第と存候

餘寒御自愛祈上候

敬具

二月二十三日

山本五十六

澤本中将閣下

別封河合氏へ御度被下度同人も近く転向の趣ニ候